

馬込半白節成胡瓜の由緒

馬込村では、昔から大井節成が多く栽培されていたが、明治33年頃に白い部分の多い、独特の性質をもった馬込半白がつくられた。市場価値も高く、馬込の特産品となった。

馬込半白は、『つる』の10節位から続いて雌花のつく節成種で、つるの伸びの強くない品種は、つるを立ててやると、よく育成することがわかり、馬込では支柱栽培を開発し確立した。

大正9年頃『大農園』という採種組合が篤農家、河原梅次郎氏を中心に数件の農家で作られ、その後、昭和8年には、『馬込半白採種組合』が高瀬三次郎氏を代表として設立され、品種の保存と均一化に努めた。

馬込で採種した馬込半白を温暖地の近県をはじめ四国、九州まで栽培指導した河原梅次郎氏の功績は大きい。

馬込半白が、この地で栽培されたのは昭和38年頃までである。

馬込大太三寸人参の由緒

古来、馬込の周辺では、砂村三寸と川崎三寸（西洋種）が栽培されていたが、西馬込の篤農家、河原清吉氏らにより、砂村三寸と川崎三寸を交配して、それぞれの長所を受け継いだ、大形で形・色のよい人参に改良され固定された。

昭和25年、大森東部農協（組合長、高橋正夫氏）が『馬込大太三寸人参』の名称で農林省に種苗登録し以後、馬込の特産品となった。

農協では農家が採種した種子を買い上げ、宮内庁の三里塚牧場をはじめ全国に販売した。また、この時期を境に人参栽培は急速に普及した。

馬込で人参栽培が盛んであったのは、昭和38年頃までで、農地の宅地化とともに徐々に減少した。

大田区のご厚意により建立

平成8年3月吉日 JA東京大森